

房総半島総合開発地域

土地分類基本調査

那 古

5万分の1

国 土 調 査

千 葉 県

1972

序 文

人口の集中、産業の集積が著しい首都圏内に位置する千葉県は、都市化、工業化の急速な進展をきたしており、今後さらに、新東京国際空港の開港、千葉港の整備、東関東自動車道路の開通、東京湾環状道路の建設、九十九里観光レクリエーション開発等によって、房総半島の地図は、大きく塗り替えられようとしている。

これら大規模施設の建設にともない、宅地開発や観光開発等が活発化し、これらの進展の一方では、自然が年々失われつつあり、人間生活と自然との関係について、あらためて問題が提起されるようになった。

したがって、今後の本県の開発を考えると、良好な自然環境の保全に配慮しつつ、これと調和のとれた土地利用を図ってゆくことがますます重要な課題となってきたといえよう。

開発地域土地分類基本調査は、国土調査法により、地形、表層地質、土壌等土地の基本的な条件ならびに開発関連諸条件の調査を実施し、急速に進む国土の開発に対し、地域の特性に応じた開発、保全等国土の有効な利用を図るための基礎資料とするものである。

千葉県では、房総半島の総合的、科学的な開発および保全を図るため、国土調査費補助金により、昭和45年度「館山」、昭和46年度「鴨川」に引き続き昭和47年度は、「那古」図幅の土地にかかる基本的性格を調査してきたが、このほどそのとりまとめをみたので、これを公表するものであり、この調査結果を行政的な利用はもちろん、開発事業者等各方面で広く利用されることを望むものである。

おわりに、本調査にあたり資料の収集調査、図簿の作成等にご協力をいただいた各位に深く感謝の意を表するものである。

昭和48年3月

千葉県企画部長

山 岡 雄 教

目 次

序 文

まえがき

総 論

I	位置および行政区画	1
II	人 口	2
III	地 域 の 特 性	2
IV	主要産業の概要	7
V	開 発 の 現 状	8

各 論

I	地 形 分 類 図	11
II	表 層 地 質 図	24
III	土 壌 図	32
IV	水系・谷密度図	39
V	傾 斜 区 分 図	42
VI	開 発 規 制 図	45
VII	土 地 利 用 現 況 図	49

ま え が き

1. 本調査は、千葉県が事業主体であり、千葉大学の協力を得て行なったものである。
2. 本調査は、自然条件のうち、土地の基本的性格を形成している地形、表層地質、土壌の3要素を基礎とし、これに傾斜区分、水系、谷密度、起伏量、開発規則、土地利用現況を加味し、その結果を相互に有機的に組合せることによって、科学的な土地利用の可能性を分類するものである。
3. 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2規定による土地分類基本調査簿である。

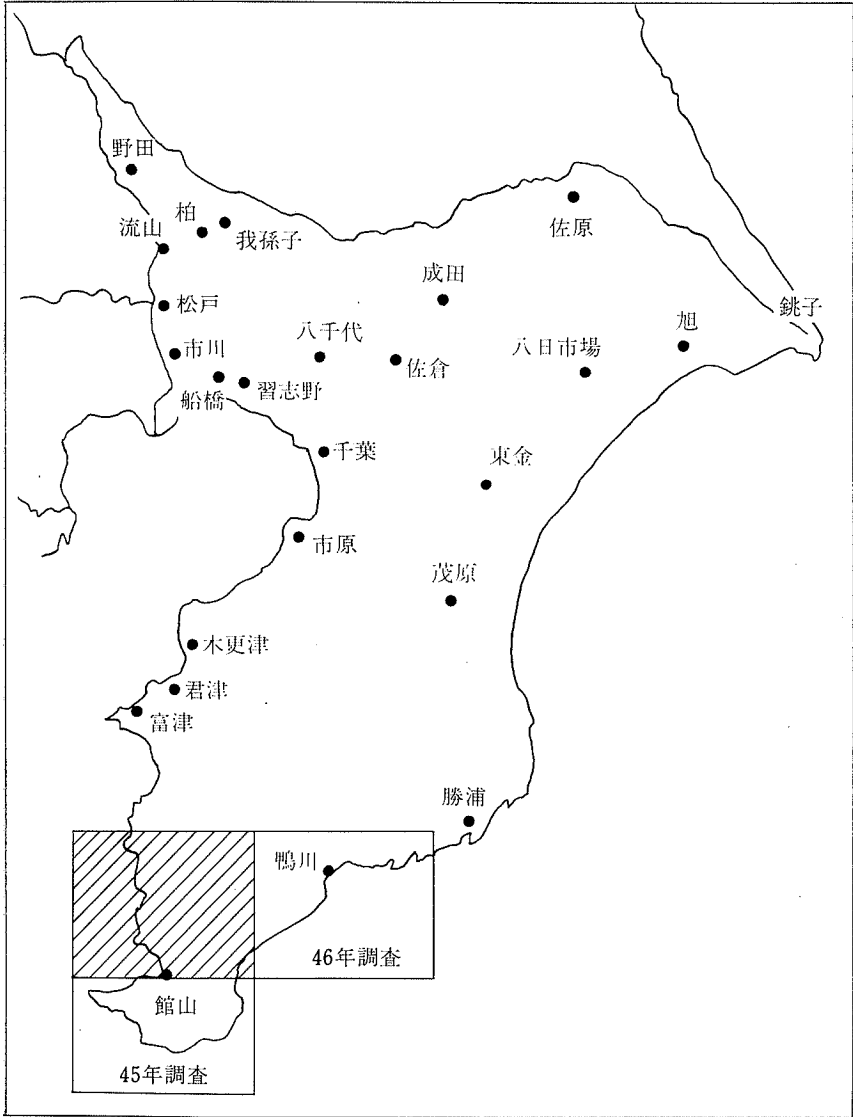
總

論

調査・成果の作成機関及び担当者一覧

企画調整編集	千葉県企画部企画課	課長	吉田 巖
	〃	係長	高梨 義雄
	〃	副主査	池谷 輝雄
	〃	主事	斉藤 剛
	〃	〃	長倉 広典
調整連絡	千葉県農林部農産課	係長	大屋 三佐夫
	〃	技師	奥西 元一
	千葉県農林部林務課	主査	深山 吉衛
地形調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎 逸郎
	〃		山野井 忠政
	〃		並木 厚
表層地質調査	千葉大学教養部	文部教官	近藤 精造
	〃		兼平 慶一郎
	〃		大原 隆
	〃		高井 憲二
土壌調査	千葉県農業試験場	地力保全 研究室長	三好 洋
	〃	技師	松本 直治
	千葉県林業試験場	育林研究 室長	榎本 善夫
開発関連調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎 逸郎
傾斜区分調査 水系・谷密度 調査 開発規制調査 土地利用現況 調査	〃		山野井 忠政
	〃		並木 厚
	〃		土屋 美保子
	千葉県企画部企画課	主任主事	熊本 俣晴
〃	主事	石川 竜雄	

位置図



I 位置および行政区画

1. 位 置

「那古」図幅は房総半島の南部にあり、南房総の南西部に位置する。経緯度的位置は、東経 $139^{\circ}45' \sim 140^{\circ}00'$ 、北緯 $35^{\circ}00' \sim 35^{\circ}10'$ の範囲である。

2. 行政区画

本図幅の行政区画は、鋸南町、富山町、富浦町、三芳村の全地域と丸山町の大部分、旧天羽町（現在富津市）、旧長狭町（現在鴨川市）、和田町、館山市の一部の3市5町1村から成っている。

第一図 行政区画



Ⅱ 人 口

本県人口は、首都圏50キロ圏の近郊整備地帯において急激に増加しており、その他の地域は、逆に減少の傾向にある。

「那古図幅」に含まれる地域は、人口減少地帯に属しており、世帯数はほぼ横ばいの傾向にあるものの、徐々にではあるが人口の減少が進んでいる。

本図幅の大部分を含む、鋸南町、富山町、丸山町、富浦町、三芳村についてみると、昭和41～47年の6年間で2,521人の減少を示している。特に若年層についてみると、昭和40年に10～14歳であった者4,737人（男2,433人、女2,304人）が5年後には、3,263人（男1,665人、女1,598人）に減少し、また15～19歳であった者4,095人（男2,133人、女1,962人）が5年後には2,702人（男1,439人、女1,263人）と若年労働力の流出が著しい。これはこの地域が第1次産業中心であり、所得水準の低さ、就業機会に乏しいためと考えられる。

今後、第1次産業の近代化により生産性の向上を図りつつ、レクリエーション開発等の地域振興策により、人口は定着化するものと考えられる。

Ⅲ 地 域 の 特 性

1. 自然的特性

「那古図幅」は、房総半島の南部に位置し、県内でもきわめて温暖な気候に恵まれた地域であるが、この地域には、海岸部及び館山平野のほかは、愛宕山、鋸山、富山等の300m級の山系が連なり、房総半島では、最も標高の高い丘陵地帯を形成しており、地層も複雑で自然条件は変化に富んでいる。

(1) 地 勢

この地域の地形は、北東部に標高383mの清澄山を中心とした山系と本県最高峰である標高405mの愛宕山を中心とした嶺岡山系が断層して東西に横たわっており、これに接して北西部の内湾側には、標高329mの鋸山、標高350mの富山を擁する山系があり、南部に館山平野が広がるほか内房、外房海岸部に低地がある。

第1表 世帯数、人口、人口の移動状況

区 分		年 次						
		昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年
天 羽 町	世帯数	4,033	4,050	4,085	4,139	4,203	4,302	4,427
	人口	17,839	17,694	17,615	17,585	17,670	17,811	17,870
	移動状況 { 総数	△ 223	△ 145	△ 79	△ 30	239	5	30
	自然増減	0	69	48	35	95	7	17
	社会増減	△ 223	△ 214	△ 127	△ 65	144	△ 2	13
鋸 南 町	世帯数	3,181	3,192	3,204	3,204	3,246	3,293	3,286
	人口	13,776	13,654	13,568	13,454	13,313	13,206	12,996
	移動状況 { 総数	△ 204	△ 122	△ 86	△ 114	△ 151	△ 110	—
	自然増減	23	22	56	31	41	35	—
	社会増減	△ 227	△ 144	△ 142	△ 145	△ 192	▽ 145	—
富 山 町	世帯数	1,799	1,793	1,794	1,806	1,796	1,799	1,811
	人口	7,684	7,472	7,328	7,163	7,339	7,289	7,280
	移動状況 { 総数	△ 179	△ 212	△ 144	△ 165	△ 18	△ 63	—
	自然増減	△ 36	3	16	28	9	14	—
	社会増減	△ 143	△ 215	△ 160	△ 193	△ 27	△ 77	—
富 浦 町	世帯数	1,702	1,696	1,702	1,688	1,707	1,702	1,715
	人口	7,318	7,165	7,082	7,039	7,129	6,940	6,971
	移動状況 { 総数	△ 131	△ 153	△ 83	△ 43	450	△ 189	—
	自然増減	△ 44	18	13	37	23	18	—
	社会増減	△ 87	△ 171	△ 96	△ 80	427	△ 207	—
三 芳 村	世帯数	1,164	1,157	1,150	1,152	1,146	1,138	1,134
	人口	5,108	5,028	4,966	4,943	4,994	4,891	4,861
	移動状況 { 総数	△ 101	△ 80	△ 62	△ 23	△ 87	△ 102	—
	自然増減	△ 15	△ 11	11	5	30	—	—
	社会増減	△ 86	△ 69	△ 73	△ 28	△ 117	△ 102	—
丸 山 町	世帯数	1,666	1,693	1,689	1,677	1,667	1,665	1,663
	人口	7,580	7,460	7,302	7,449	7,060	6,976	6,837
	移動状況 { 総数	△ 210	△ 120	△ 158	153	△ 182	△ 84	—
	自然増減	△ 23	4	△ 17	1	△ 29	20	—
	社会増減	△ 187	△ 124	△ 141	152	△ 153	△ 104	—

このようにこの地域は、主として東西に長い断層線と南北に細かく切れた断層線からなり、隆起により形成された山岳部は、寄せ木細工のように細断されており、また河川による開折等が加わり、複雑な地形を呈している。

これらを形成する地層は、ほとんどが房総半島を構成する新第3系によってできたものであるが、嶺岡山系、これより古い古第3系（嶺岡層）や火成岩類により構成されている。これらの層群は、嶺岡破碎帯といわれる破碎帯上にあり、複雑な構造線によって分離、独立し、断層線が入り乱れて極度に乱状態を示しており、地すべり地帯になっている。

河川についてみると、この地域には大河川はないが、内房に流出する保田川、佐久間川、岩井川、岡本川、平久里川や外房に流出する三原川、丸山川、温石川、加茂川等の2級河川があるが、いずれも流量は少ない。

このうち平久里川上流は、梨棚状流路を形成し、特色ある地形がみられる。

(2) 気 象

気象についてみると、この地域は暖流の影響を受けた典型的な海洋性気候に恵まれており、冬期1月の平均気温は、6.5°C、夏期8月の平均気温は27.2°Cと年間を通じての温度差は少なく暖冬夏涼である。

また初霜は、山間の一部で11月中旬にあるほか大体12月以降にあり、晩霜は3月下旬である。そのほか年間快晴日数は85日（午前9時観測）、年間降水量は1,600mmと多雨である。

第2表 月別平均温度、降水量

(昭和46年)

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
種別												
平均気温(°C)	6.5	6.6	8.8	13.4	18.0	21.9	25.9	27.2	22.9	16.8	12.5	9.4
降水量(mm)	92	106	101	136	119	106	68	178	285	322	32	90

注) 富山観測所資料

(3) 動 植 物

植物についてみると、全般的には海岸部にはクロマツが多く、内陸部にはコナラ、クリ等の自然林が大部分を占め、一部マツ、スギ、ヒノキの人工林があるほかススキ、アズマネザサの草原がある。

特筆されるものを地域的にみると、館山には中腹まではタブ、シイ、シロダモ、カシ類等の常緑広葉樹林やエノキ、カエデ類等の落葉広葉樹林が大勢を占めているが、中でもバクチノキはこの地域を北限としている。林床にはシモツケ、ヤマホタルブクロ、タマアジサイ、ヤマハギ、ノマンギク等があるが、湿った崖にはベニシダ、ホシダ、コモチシダ等のシダ類が多い。山頂近くは風当たりが強く、タイミンタチバナ、トネリコ、カマツカ、シラキ等が低木状に続いている。

富山についてみるとタブ林が広くあるほかヒメユズリハ、ツバキ、イズセンリョウ、アリドウシ、イノデ等がある。富山の特徴としてはフモトシダ、オリズルシダ、リョウメンシダ等林床に約60種のシダがあることである。

嶺岡山には背の低いクロマツと落葉低木のカマズミ、コナラ、ヤマツツジ等の群落があるほか山麓や谷間にはスギの植林が多い。

また保田、勝山、館山等の海岸にはアオサ、ヒジキ、ホンダワラ、イシゲ、イワヒゲ等がみられる。特に館山湾の岩礁性サンゴは北限である。

動物についてみると、鳥類は県の鳥に指定されているホオジロを始めメジロ、ウグイス、ヒバリ、ヤマガラ、キジ、ヤマドリ、コジュケイ、山シギ、キジバト等多種類が棲息している。

しかし近年これらの鳥類を愛玩用に捕獲する傾向にあり、数も減少しているので野生鳥類の適正な保護策が重要な問題となっている。

哺乳類は、清澄山系にシカが棲息しているほかりス、イタチ、野ウサギ等が主なものである。

また、魚介類はタイ、ヒラメ、キス等の根付魚、イワシ、アジ、イナダ等の回遊魚のほか、アワビ、サザエ、赤貝等がみられる。

2. 社会経済的特性

この地域は、自然環境と気象条件に恵まれ、農水産業の盛んなきわめて豊かな地域であったが、丘陵的な地形と袋小路から道路、鉄道網が整備されておらず、他地域の変化の波を受けずにきた。

しかし、近年、都市化、工業化の急激に進展する首都圏大都市部の影響が徐々に浸透してきており、労働力の流出が顕著になっている。

このため、安房郡市広域市町村圏を設け、立ち遅れている道路、鉄道の整備を推進しつ

第3表 就業構造

(昭和45年国勢調査)

産業構造	市町村		天羽町		鋸南町		富山町		富浦町		三芳村		丸山町	
	人数	シェア(%)	人数	シェア(%)	人数	シェア(%)	人数	シェア(%)	人数	シェア(%)	人数	シェア(%)	人数	シェア(%)
総	9,487	100.0	6,661	100.0	4,178	100.0	3,613	100.0	3,021	100.0	4,446	100.0	4,446	100.0
第一次産業	4,139	43.6	2,872	43.1	2,314	55.4	1,892	52.4	2,077	68.8	2,756	62.0	2,756	62.0
農業	3,490	36.8	2,180	32.7	2,219	53.1	1,452	40.2	2,062	68.3	2,722	61.2	2,722	61.2
林業	12	0.1	14	0.2	6	0.1	5	0.1	11	0.4	11	0.2	11	0.2
狩猟業	637	6.7	678	10.2	89	2.1	435	12.0	4	0.1	23	0.5	23	0.5
水産養殖業														
第二次産業	1,727	18.2	987	14.8	604	14.5	568	15.7	265	8.8	412	9.3	412	9.3
鉱業	100	1.1	71	1.1	60	1.4	3	0.1	3	0.1	4	0.1	4	0.1
建設業	705	7.4	349	5.2	186	4.5	184	5.1	84	2.8	193	4.3	193	4.3
製造業	921	9.7	567	8.5	358	8.6	381	10.5	178	5.9	215	4.8	215	4.8
第三次産業	3,587	37.8	2,792	41.9	1,258	30.1	1,153	31.9	678	22.4	1,278	28.7	1,278	28.7
卸売業・小売業	1,371	14.5	1,130	17.0	493	11.8	482	13.3	225	7.4	327	7.4	327	7.4
金融・保険・不動産業	121	1.3	77	1.2	32	0.8	38	1.1	27	0.9	32	0.7	32	0.7
運輸通信業	676	7.1	623	9.4	189	4.5	253	7.0	82	2.7	164	3.7	164	3.7
電気・ガス・水道業	65	0.7	28	0.4	4	0.0	11	0.3	8	0.3	13	0.3	13	0.3
サービス業	1,103	11.6	813	12.2	465	11.1	314	8.7	269	8.9	375	8.4	375	8.4
公務	251	2.6	121	1.8	75	1.8	55	1.5	67	2.2	367	8.3	367	8.3
分類不能	35	0.4	10	0.2	2	0.0	0	0.0	1	0.0	0	0.0	0	0.0

つ、自然条件の良好なこの地域の特性にかなった、農水産業、観光レクリエーションの振興を図っている。

IV 主要産業

1. 農 業

房総半島の西南部に位置するこの地域の農業は、首都圏75km圏という地の利に恵まれているのみならず、温暖多雨、特に夏涼冬温という恵まれた自然環境にある反面、地形上傾斜地が多く、耕地が狭少なため、酪農、花き、果樹、野菜等を基幹とする経営の集約化、商品生産化が進んでいる。

主要作目をみると、まず酪農は富山町、三芳村、丸山町にかけて千葉県一の主産地を形成しており、花きでは鋸南町のカーネーション、富浦町の花木、アイリス、果樹では富浦町のびわ、鋸南町、富山町、三芳村、丸山町の柑きつ類、野菜では三芳村のいちご、きゅうり、丸山町のパセリ、レタス等である。

このように古くから多彩性のある農業が展開されているが、全国的に交通ネットワークの整備、農業の施設化が進んでいる状況から、この地域のもつ地の利、自然条件の有利性が相対的に低下しつつあり、今後、首都圏の生鮮食料品の供給基地として、千葉県における主要な農業地域として発展していくためには、流通体制の整備、産地間競争力のある主産地の形成、地域の自然景観を生かした観光農業の展開が課題である。

2. 水 産 業

浜金谷から館山湾に至る海岸線は、比較的静穏な海況で海岸線は屈曲に富むため漁港条件に恵まれ、海岸線に保田、勝山、船形など、10漁港を数える。

魚種をみると、サバー本釣り、あぐり網によるイワシ、アジ、刺網によるヒラメ、カレイ、エビ、イナダ等である。

また、養殖もさかんで金谷、岩井、富浦、船形でノリ、勝山、岩井、館山でホタテガイ、富浦でワカメの養殖が行なわれている。

しかし近年、漁獲高は全般に減少傾向にあり、さらに若年労働力の他産業への流出、経営規模の零細性による生産性の停滞等の問題を生じており、今後この地域の水産業の安定化のためには、養殖業の振興が課題となっている。

3. 商 業

この地域の商業は、商圏人口12万人を擁する館山市の商圏に含まれており、館山市への依存度が強い。しかも近年、情報化の進展、交通網の整備等に伴い、木更津市、さらには千葉県への傾斜を強めており、地元購買力の確保は一層苦しくなっている。

しかし、夏季の海水浴客による商店のにぎわいは、観光の周年化を図り、観光客を吸収して商業の近代化を推進することがこの地域の商業振興の道であることを示している。

4. 観 光

南房総国立公園に指定されている海岸線は、変化のある海岸風景が展開し、大房岬等の突出部は磯釣りの名所として近年脚光を浴び始め、保田、岩井、富浦等の湾凹部の砂浜は海水浴の適地としてにぎわいをみせ、民宿もさかんである。特に岩井海岸には学生村や多くの臨海学校がある。

一方山岳部は、石切場跡の独特の景観を有する鋸山、里見八犬伝の伝説をもち房州名山の一つですぐれた眺望をもつ富山等森林景観に恵まれている。

こうした観光資源をさらに生かしてゆくため、道路網の整備、施設の整備がすすめられている。

V 開 発 の 現 況

この地域は、農林水産の第一次産業が中心であり、他地域に比べて開発の進展が遅れている。しかし、近年、東京の過密が激化しているおりから、いまだ開発の波を受けていない本地域の魅力が増大しており、観光レクリエーションの場として開発が期待されている。

1. 道路、鉄道

この地域の道路は、国道2路線、主要地方道2路線、一般地方道12路線があり、ほぼ網の目状をなしている。

縦に国道127号線、地方道君津館山線、吉尾千倉線が館山へ向って集まっており、これらを縦軸にして地方道が内房と外房を結んでいる。

国道127号線は東京湾沿いに木更津方面より館山方面へ向って走っている。

鴨川保田線は鴨川より長狭地区、富津市上畑地区を経て、鋸南町に至り、国道127号線

に接続し、君津地区と館山市を短絡する幹線道路である。現状においては整備の遅れが見られる。

一般県道は主なもので、外野勝山線、鴨川岩井線、丸館山線がほぼ区域内を横切る形になり、ほかに吉尾千倉線が域内を縦断している。

鉄道は、内房線、外房線があり、昭和47年7月外房線の電化が完了したことによって房州を一周する電車の運行、特急電車の運行により都心までの時間距離は短縮された。

2. 港 湾

地方港湾である浜金谷港は対岸神奈川県久里浜港との間のフェリーポートにより、京浜方面との物資の移出入および南房総への観光客の輸送に利用されており、京浜と房総を結ぶ唯一のフェリーポートとして、昭和46年実績でフェリー乗降客は70万人にのぼっている。

3. 漁 港

この地域は屈曲した海岸線、おだやかな海況で漁港の立地条件に恵まれており、漁港は10を数え、漁港の集中地域と言える。この内2種漁港は保田、勝山の2港、船形が3種漁港であり、残りが第種漁港となっている。

4. 水 資 源

この地域には2級河川の金谷川、元名川、保田川、佐久間川、岩井川、岡本川、福沢川、平久里川、滝川、増間川、大谷川、山名川、丸山川、加茂川の14河川があり、上水使用が目的の鋸山ダム、増間ダム、農水使用が目的の丸山ダムの3つのダムがある。

さらに水源の確保を図るため、昭和49年までに上水として平久里川の大谷ダム、昭和55年までに農水として佐久間川の佐久間ダムの建設が計画されている。

各 論

I 地形分類図

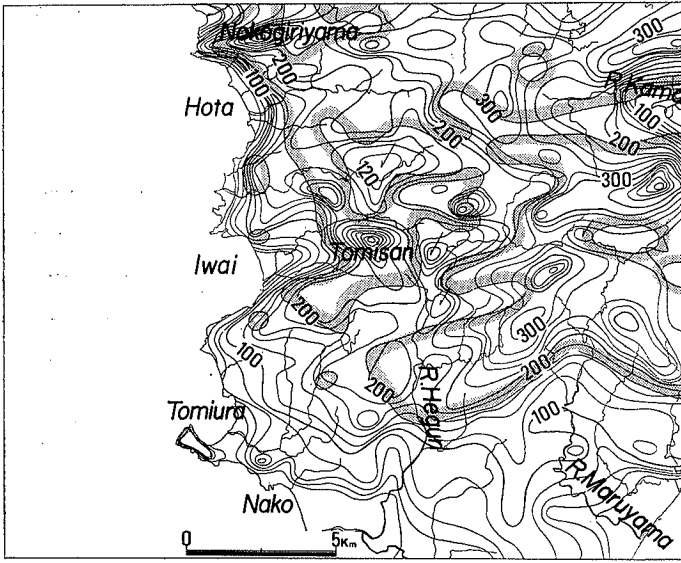
「那古図幅」は房総半島の中では規模の小さい山地（丘陵性山地を含む）が集まっている。これらの山地は開析が進んでいるためか航空機から見下すと高さの割に急峻な感じを与える。機上からさらに良く見ると鋸山・富山山塊群、清澄山塊群、嶺岡・高鶴山地、御殿山・経塚山山塊、富浦丘陵等それぞれの相互的な位置は直線状に入る断層によって分断されているように見える。この断層に沿って流路が入り山地、丘陵地の形状や輪郭を一層はっきりさせている。

地形分類図の中の流路、水系をみると、北から保田川、佐久間川、岩井川の谷と平久里川の上流の谷、加茂川の上流の谷等、東西方向に入る谷すじと、これに斜交するように平久里川とその中流の谷、丸山川とその中流の谷、岡本川の谷等が北東から南西方向に入り東西方向にくる谷と交錯しているのがわかる。その結果、本図幅では山地、丘陵地の輪郭が平行四辺形になっているところが多い。このような水系、谷系が本図幅の特徴のひとつでもある。

東西方向に入るそれぞれの谷すじが東の浦賀水道方向に延びたところには北から保田、勝山、岩井、岡本の低地がある。これら低地と低地の間にある山の尾根すじにあたるところの浦賀水道側は剪断されたような断崖となっている。この断崖の急斜面は東京湾海低谷東側の急斜面に続いている。

次に本図幅の全体の起伏の傾向をみるため切峯面図をつくってみると第2図のようになっている。地形分類図の中で小起伏山地に区分されているところの大部分は200～300mの面で、この中で300m以上のところは、200m以上の高さをもった面の中に残丘状に分散しているのみである。前記したように開析が進んでいるのであまり規模の大きい山地ではない。平久里川はじめ主要河川は切峯面図の中の凹地を流れるものが多い。

しかし、平久里川、岩井川、佐久間川上流、岡本川では現流路は切峯面の地形を切って流れている。つまり山なみを切って川が流れている。また、平久里川丸山川等の主要河川の上流は凹地状の平坦地となっているところが多く、佐久間川上流、富山東側の平久里川

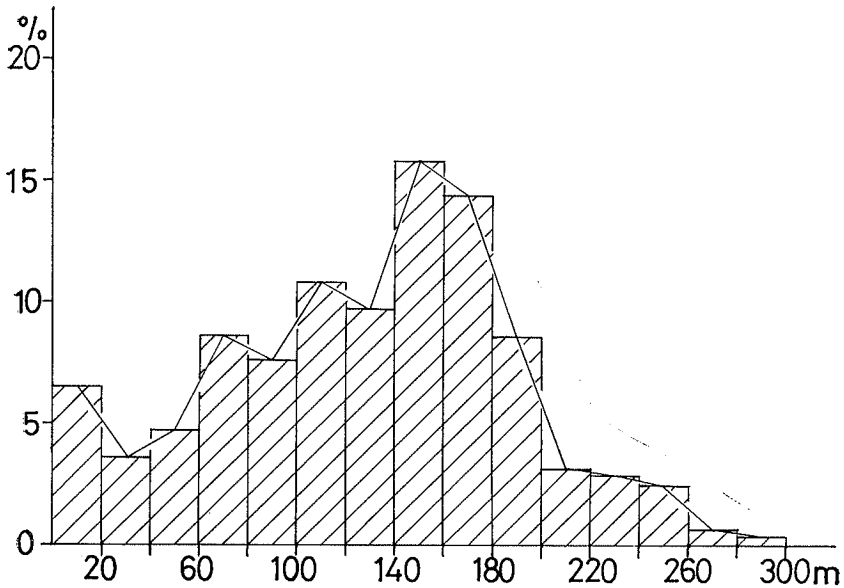


第2図 切 峯 面 図

図幅を縦横20等分した方眼の中の最高点を結んで、各方眼の値から等値線を引いて作った。等値線は20mである。次に同じ方眼を使って最高点から最低点の値を引いて起伏量として等値線図をつくり、起伏量値150m以上の分布を切峯面図の中に入れた。それが図の中のアミの範囲である。本図幅では切峯面の高いところと起伏量値の大きいところとは一致している。

沿い、加茂川上流、丸山川上流には、はっきりとした凹地状の平坦地がいくつかある。切峯面図では凹地となっているところである。このような凹地状の地形があるのも本図幅の特徴である。

開析状態をみるため、第3図の切峯面図に起伏量150m以上のところを入れてみたのが同図のアミ模様のところである。切峯面の高いところと起伏量値の大きいところとはほぼ一致しており、これは、鴨川、館山図幅と違うところとってよかろう。起伏量が大いといっても、実際の起伏量値の数値分布をみると第4図のように最高の起伏量値である



第3表 起伏量値の分布図

260~300mの間は本図幅の僅か1.1パーセントに過ぎない。起伏量値の大勢を占めるのは100~200mの間で、それぞれが第5図のように図幅全体の10~15パーセント程度である。とくに大きなパーセントを占める数値はない。このようなことから本図幅が小規模の山地の集まりであることを物語っている。

本図幅を次のような地形区に区分した。

- I 山地
 - I a 鋸山・富山山塊群
 - I b 清澄山塊群*
 - I c 御殿山・経塚山山塊群
 - I d 嶺岡山・高鶴山地*
- II 丘陵・
 - II a 富浦丘陵
 - II b 江見・和田丘陵*
 - II c 館山北部丘陵*
 - II d 那古丘陵

- II e 館山南部丘陵*
- II f 真門丘陵
- III 低地 III a 館山低地*
- III b 丸山川低地（三原川低地を含む）
- III c 富浦低地
- III d 岩井低地
- III e 平久里川低地
- III f 勝山低地
- III g 佐久間川低地
- III h 岩井川低地
- III i 保田低地
- III j 加茂川低地帯*
- III k 金谷低地
- III l 瀬戸浜低地*

以上のうち*印は隣接図幅である鴨川、館山図幅に記載されている名称である。詳しい記載はそれぞれの図幅の説明を参照して頂きたい。次頁は本図幅の代表的地域である鋸山・保田低地の航空写真とその解析図である。

I 山地 (Mm, Ms)

1-1 鋸山・富山山塊群 (I a)

鋸山, 富山, 伊予岳等大小の独立山塊からなる地域である。海岸側には保田低地, 勝山低地があり, 山塊の中に佐久間川低地, 岩井川低地がある。保田川, 佐久間川, 岩井川の谷が東西方向に入り, これと斜交して東北から西南に平久里川, 加茂川の上流の谷が入り, そのため山塊は分断されていくつかの山塊群をつくっている。谷密度や傾斜分布からみるとこれらの山塊群は非常によく開析されている。上から山塊群をみると細かい山ひだが全域に入り, 直線斜面を組みたてたような山地に見える。

冬季この地域を上空からみると植生の隙間から山肌が白く見えるところが多い。山塊群としてみると全体に東西方向に配列しているが隣接するひとつひとつの山塊は谷の入り組みぐあいなどは全く違う。そして, 前記した主要な谷すじに沿って各所に袋状の平坦地が分布している。その最も大きいのが岩井川低地と佐久間川低地である。この平坦地の周縁は岩盤が風化し粘土化しているところが多く, 地下水の湧水個所も多い。稜線近くにある馬蹄形の窪みとその下部にある盛上ったような丘, あるいは新しい扇状地状の堆積物が平坦地の周縁に段丘状に配列している。その一番地表には無数の棚田が斜面をつくっている。典型的な地入り地域である。(第4図参照)

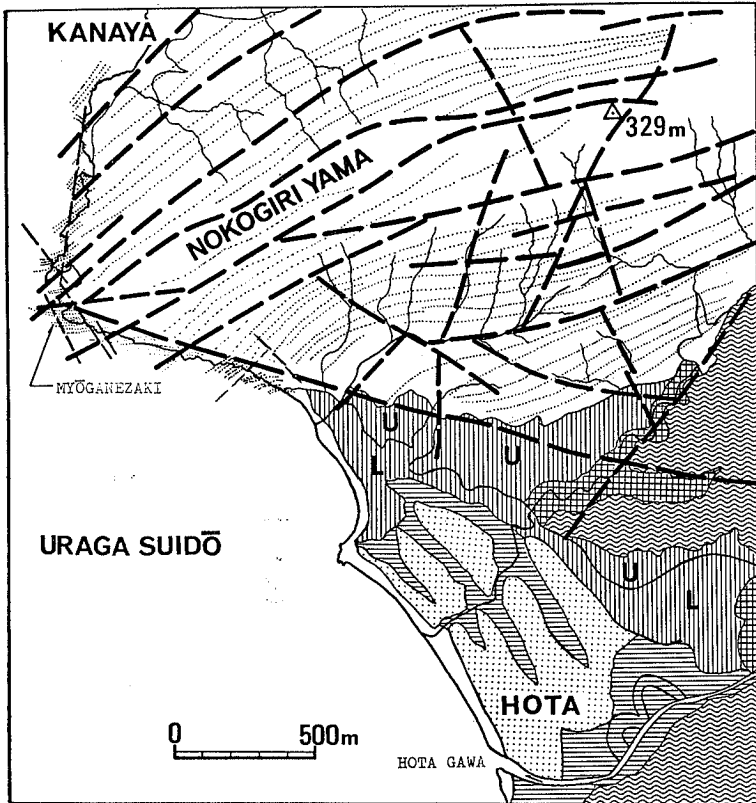


第4図 富山東側にある地入地に
みられる千枚田の景観
(昭和47年12月千葉大学
川崎撮影)



第5図 那古図幅の代表的地域である鋸山山地と保田低地の航空写真，鋸山の南側と北側に白く見えるところは，新らしくできた建材用の石切場（採石場）である。次第に山体を崩してゆく状態がわかる。

このままでは鋸山山体がもっている水は次第に減少し，地下水位は低下してしまう。



第6図 第4図の航空写真から判読解析した鋸山山地の構造線と保田低地の地形分類。太い破線と細い破線は構造線，点線は地層の走向線，波線は山地，縦線は海成段丘でUは上位面，Lは下位面，格子は河岸段丘，アミは砂州，横線は砂州間低地のところである。鋸山山地についてはパターンを省略した。明鏡崎より東南に走る大きい構造線を境として地層の走向が違っている。

本地域の代表である鋸山山塊は図幅の北端にあり、東北東から西南西に長く、南北方向に短い楕円形の輪郭をもっている。山塊の中央部が盛り遠望すると水面上のイルカの背中のようなものである。山頂付近は古くから石切場となり採掘によって切取られた人工崖が続き鋸山独特の景観をつくっている。鋸山の100~200m付近では等高性のやせ尾根がとりまいている。

鋸山、富山山塊群の南、岩井低地の東側には富山が聳えている。機上からみる富山は規模の大きい独立峰に見えるが、東から西側に傾いている傾動地塊のようにも見える。その高い方の東側斜面はあまり刻まれておらず高比300mの単調な急斜面がそそり立っている。この急斜面の裾をとりまいて地₂地特有の千枚田の水田がみごとな高等線のパターンを描きながらひろがっている。(第4図参照)

1-2 清澄山塊群 (I b)*

本図幅中の清澄山塊群は鴨川図幅の清澄山塊群の西方への延長である。両図幅の違いは、那古図幅中の加茂川低地に面する山地の前面は鴨川図幅にある同区分にくらべて開析が進んだ状態にあることで、他はほとんど変っていない。

1-3 御殿山・経塚山山塊群 (I c)

富浦丘陵の東に位置し、海拔364mの御殿山を中心とした山塊と、その東、丸山川の対岸海拔311mの経塚山を中心とした山塊を併せた地域である。御殿山を中心とした地域は東側を丸山川、西側、南側と北側は平久里川の本流とその支流によって区切られ、山塊の輪廓は平行四辺形をしており、丸味をもった稜線が多い山容で起伏量の割にはゆったりとした景観をもっている。しかし、上記河川に面する周縁地域は、開析度が大きく中央部に比し細かく刻まれているのが特徴である。経塚山塊の方も同様のことがいえる。両地域とも中央部より北側は地₂り発生地が多く山あいを埋める千枚田の棚田はみごとである。

1-4 嶺岡・高鶴山地 (I d)*

鴨川図幅にある嶺岡、高鶴山地の西側への続きである。本図幅中の地₂り多発地域の中心でもある。鴨川図幅と違うところは、地₂り地域の広いことと、谷密度が多いため地形が複雑となっていることである。とくに本区域の西側平久重川に面する花表裏、御初畑、川辺組より東側一帯の地域の地₂り地の規模は大きく、現在地₂り調査とその対策工事が進められている。嶺岡地域の地₂り調査については鴨川図幅説明に記載したので参照していただきたい。

Ⅱ 丘 陵 地

2-1 富浦丘陵地 (Ⅱ a)

本図幅の中では西南地域を占めており、北側に高く南に低い。北側の岩井低地と富山に面するところは、東西方向に急斜面が続いている。地域全体をみると、傾動地塊と考えるもよいようである。この丘陵を切って、岡本川とその支流が南西に流れ、富浦丘陵を南西方向に刻んでいる。

機上から観察すると、地形図上でみるより谷低面が広い。富山や保田低地側（北側）を除いて、富浦丘陵全体がやせた細長い丘陵の列からできあがっているように見える。この丘陵地域の中にも地入り地が散在している。とくに北側の東西方向に急斜面下には、湧水の多いこと、地入り地の多いことから、この急斜面は断層崖であろう。すなわち本丘陵は岩井低地、富山と断層によって接していることになる。

2-2 江見・和田丘陵 (Ⅱ b)*

鴨川図幅の江見・和田丘陵に続く丘陵地で、北は経塚山山塊を取り巻き、南は海岸近くまであり、東側は丸山川で終わっている。丸山川の支流に刻まれ、丘陵と丘陵の間の谷低面は丘陵の規模の割合には広い方で、小規模の河岸段丘が発達している。北部は丘陵地Ⅰの区分に入り、地入り発生地が散在し、円頂丘状のところが多い。その南は丘陵地Ⅱの区分のところとなり、谷の面積と丘陵地の面積がほぼ等しいくらいよく開析されたところである。集水面積の割には大きな貯水池が多い。鴨川図幅でみられたような直線状にのびる構造性の谷はみあたらない。

2-3 館山北部丘陵 (Ⅱ c)

東側にある江見・和田丘陵と同じく北側に比高の大きい丘陵地Ⅰに入るところと、南側のよく開析された丘陵地Ⅱに入るところとがある。北側は平久里川を距てて御殿山山塊に、南側は館山南部丘陵に接し、西側は平久里川の主流に接している。平久里川の支流、山名川、滝川によって細かく刻まれている。この丘陵では、谷の配列からこの地域をつくっている構造線の配列（リニアメント—線條構造）を一般的に知ることができよう。

延明寺丘陵—（関東大地震のとき延明寺とその付近の地盤の動きは館山地域で最も大きく、到壊の規模も大きかった……。延明寺付近を通る断層が動いたともいわれ、新しく発

生したともいわれている。この断層を延明寺断層と呼んでいる一)の東縁に沿うて流れる山名川が東に流路を変えるところから→深井の峠→前田→丸山川の方向と、これに直交する南北方向の谷、斜交する北西から東南方向の谷は、はっきりしているものであろう。山名川より南になると北側より開析度は大きく、地形図上でみるよりは細かく刻まれ、谷地面積の方が丘陵地より大きい。少しでも規模の大きい丘陵地の中の谷地は貯水地として利用されているところが多い。近年、宅地化の影響はこの丘陵地に及び、少しずつ変形しているところがある。丘陵地の土地利用の特色は果樹園である。普通畑地から果樹に転向したところも少くない。

館山北部丘陵全体を見渡したところ、当地域の基盤岩石の風化は、非常に進んでいるところと、進んでいないところがある。つまり、基盤の上の被覆層が厚いところと薄いところがある。どちらにしても、集中豪雨に襲われると、基盤上の被覆層は極めて剝げやすいところである。丘陵の奥にある谷地のところ、縁斜面上の畑地は台風時期には注意を要するところでもある。

2-4 那古丘陵 (II d)

富浦丘陵の南に付着したようにあるのが那古丘陵。地形的な特徴は上記館山北部丘陵、江見・和田丘陵とほとんど変わらない。しかし、この丘陵の屋根すじは、富浦丘陵に入る南西方向の谷に直交するように西に向い、富浦低地の南を左旋回して取巻いている。その先端は半島状にのびて太房岬となり、丘陵全体は、東西方向にのびて、館山低地の北の境界をつくっている。太房岬のある半島は周囲を海食崖状の急崖に囲まれた台地状(海岸段丘)の地形をしており、その先端部は、北東～南西の急崖で終っている。台地面に相当するところは林地と畑地になっており、ほぼ南西に傾いている。

2-5 館山南部丘陵 (II e)*

館山低地の東縁をつくっている丘陵で、その大部分は館山の図幅中にある。館山図幅に記載したところと全く同じ形態のため、説明は館山図幅を参照していただきたい。

2-6 真門丘陵 (II f)

富山の東にある緩い斜面をもった丘で、平久里川と岩井川低地の境界をつくっている。丘陵全体が丘頂まで地汙り発生区域である。湧水箇所と千枚田が多いところで、基盤は風化が進んで軟弱地盤となっており、集中豪雨時には、嶺岡、高鶴山地の西縁地域とともに本図幅中最大の危険区域となる。

Ⅲ 低 地

本図幅の低地は形態からみて非常によく似ているものが多いので、各区分ごとに記載するのではなく、共通性をもっているものについては、一括して記載した方が使用する際に便利のため次のようにする。

富浦低地 (Ⅲ c), 岩井低地 (Ⅲ d), 勝山低地 (Ⅲ f), 保田低地 (Ⅲ i), 金谷低地 (Ⅲ k)

東京湾に面したこれらの低地に共通することは、弧を描く海岸線と海岸線に平行した数列の砂丘、砂丘と砂丘の間にある湿地、その背後の広い低地、周囲を山地、丘陵地に囲まれていること、周囲の山地、丘陵から流れ出た河川が低地に一部河岸段丘をつくっていること、広い低地の周囲あるいは一部に海成段丘の平坦面が残っていること、低地を流れる河川は地盤の上昇運動のあとをみせて低地面を深く切って流れていること等であろう。低地は水田、海成段丘面は畑地、砂丘のところは主要な交通路となり、また集落が密集するところとなっていることも共通することである。以上の東京湾に面する低地のうち最も規模の大きいのが岩井低地である。最も規模の小さいのが保田低地で、低地の半ばは海成段丘となっている。(第6図参照)

また、低地の広さとは関係なく砂丘列があり、低地の奥から海側に順次平行に配列し、その中で海岸にある砂丘帯が最も大きい。これら砂丘列は、本図の東京湾側が次第に陸化し上昇運動を続けてきた名残りである。その典型的なものは館山低地にみられる。

丸山川低地 (Ⅲ b), 平久里川低地 (Ⅲ e)

丸山川、平久里川の蛇行によってつくられた低地で谷低面である。川の両岸には蛇行のあとを残した数段の河岸段丘がある。両河川とも上流は地汙り地域を流れているので谷低面は次第に周囲の緩斜面に移行しており、通常の河川のように深いV字谷をつくらない。中流から下流域になると低地面(谷低面)は急に広くなり、低地に出るところでは山地側、丘陵地側では海岸段丘が最高位を占めており、この海岸段丘を刻んで両河川の谷低が開けている。丸山川下流一帯には海岸段丘面がひろがり、そこは現在の流路より一段高いところで、川の東側にある岩糸も西側にある加茂、馬谷地域も広い水田面となっている。海岸には砂丘列が並び、その奥は丸山川の湿地(湖のあと)となっている。両河川とも排

水、給水施設が不十分なため集中豪雨時には洪水を起しやすい性格をもっている。

佐久間川低地 (Ⅲ g)、岩井川低地 (Ⅲ h)

鋸山・富山山塊群の伊予岳から西にのびる小起伏性山地の稜線の北側にあるのが佐久間川低地、南側にあるのが岩井川低地である。どちらも東西方向に長いが、規模は北側の佐久間川低地の方が大きい。両低地とも山地に囲まれた袋状の、あるいは盆地状の平坦地で、周囲には低地の谷低面より一段高く、開析された丘陵性の尾根が配列しているところである。両低地とも上流地域はすべて地汙り地域で、とくに富山東側にあたり岩井川低地上流部は広々とした千枚田、柵田からなる緩斜面のところがひろがっている。岩盤に風化が進み粘土化しているところが多く地盤の弱いところでもある。

館山低地 (Ⅲ a)*

本図幅の館山低地は、館山図幅の館山低地の北部地域を占めるもので地形上の特徴、弧状の海岸線、砂丘列の配置等は館山図幅と全く同じなので重複を避ける。ただし、東側館山南部丘陵地域に広がる場所は、基盤岩石が意外に高いところ(水田面より2~3m)に広がっているので、一般の低地と考えるより、隆起した海岸段丘と考えた方がよい。基盤が高いため、集中豪雨時には、各所に洪水区域が出現し、埋没している旧地形面を浮き上がらせてくれる。館山図幅の平砂浦海岸に面する平砂浦低地に類似したところである。

北の方に小規模であるが、船形地域に富浦低地や勝山低地に似た低地がある。低地の水田には半月形的地割のあとが残り海岸には小さいながら砂丘が数列ある。5万分の1で地域区分を行なうので一応館山低地に含めた。

加茂川低地帯 (Ⅲ j)*

鴨川図幅の加茂川低地帯の西側に続く地域である。東側の低地帯に比べて低地の中も狭い。北側の清澄山塊群と南側の嶺岡・高鶴山山地とが迫っているところである。したがって谷低面も狭く、谷低面背後の上位面(崖錐)からすぐに開析された丘陵地、小起伏山地と続いている。この低地帯の東に延びている加茂川の谷低面は、長狭町の平塚付近にある盆地状の平坦地で終わっている。このような袋状の平坦地は本図幅中に度々記載したところで、平塚では布袋后、房田等の地名のごとく地汙り地の千枚田に囲まれたところである。富山東側にある地汙り地域と同様、集中豪雨時に地汙りや山腹崩壊の危険性を秘めたところである。

瀬戸浜低地 (Ⅲ l)

館山図幅の瀬戸浜低地の北端にあたる。本図幅には、幅500m、長さ700m程度の面積が顔を出しているのみ、砂丘帯が瀬戸浜低地と丸山川低地の境界をつくっている。館山図幅の記載を参照していただきたい。

（千葉大学文部教官 川崎逸郎）

Ⅱ 表層地質図

本図幅地域の中央部は、嶺岡山系と、これを西へ延長した地域に相当し、嶺岡層群、保田層群が分布している。この地域と断層で境して、これら層群より新しい新第三系が、北部では鋸山向斜構造をなし、南部では房南地向斜堆積物の繰り返された褶曲構造を示して分布している。

地質構造は、全般的にみて、東西方向の伸びが顕著であり、褶曲軸の方向もほぼこれに近いものが多い。また、断層の方向も東西が多く、これに次いで南北方向の小断層がみら

第4表 層 序

時 代		地 域		北 部	南 部
		層 群			
第 四 紀	沖積世	上総層群	関	竹岡凝灰岩層	豊房累層
	洪積世				
新 第 三 紀	鮮新世	三浦層群	豊岡	萩生火砕岩層	千倉累層
	中新世			稲子沢層 千畑礫岩層	
		安房	天 津 層		
			佐 久 間 層		
	保田層群				
	古第三紀?	嶺岡層群			

れる。したがって、各層相互の直接の地質関係のみられる場所は少なくなっている。

図幅地域内に分布する地層の層序は第4表に示すとおりであり、このほかに嶺岡山系の地域などには、玄武岩、斑礫岩、蛇紋岩など火成岩類が分布している。

嶺岡層群、保田層群の地質構造は複雑であって、一般的に急傾斜の地層が多く、安房層群では鋸南町佐久間地域で層序がよくわかっている。

豊岡亜層群の地層は褶曲構造がよくわかり、傾斜角は30～60度ぐらいとなっている。これに対し、関亜層群では傾斜がゆるくなり、豊房累層では30度以下のものが多くなっている。

1 未固結堆積物

1-1 泥がち堆積物 (m)

泥がち堆積物は、海岸に沿っては、金谷、保田、勝山、岩井、富浦、館山の低地に、また平久里川、丸山川、加茂川などに沿う谷底平野に分布している。

構成物は、おもに軟弱なシルトからなっているが、山地の縁辺では、崩壊性の堆積物として岩石片がかなり含まれている。

1-2 砂がち堆積物 (s)

砂がち堆積物は、海岸の浜砂として、西海岸の金谷、保田、勝山、岩井、富浦、館山低地の海岸汀線ぎわに分布し、また砂丘を構成している。

1-3 ローム層

火山灰風化層とみられるローム層が、富浦町大房岬および嶺岡山系などで小地域にみられ、そのほか、2次的なローム層も存在している。

2 半固結～固結堆積物

2-1 泥岩 1 (ms_1)

豊房累層の主体をなし、灰白色を呈し、一般に60cmぐらいの厚さの各単層中に薄い凝灰質砂が入っている。館山市本織、竹原から丸山町にかけ分布している。

2-2 砂岩泥岩互層 1 ($altms_1$)

豊房累層の中～上部に相当し、暗灰色の凝灰質砂と灰白色のシルト岩の互層である。館山市那古の東から御庄、沓見にかけ分布している。

2-3 砂岩 1 (ss₁)

豊房累層に属する砂岩で、暗灰色の凝灰質中粒砂より構成され、ときに礫、軽石、スコリアを挟むことがある。

2-4 礫岩 1 (cg₁)

豊房累層の上部にみられる滝川含貝殻砂礫層に相当し、館山市那古小学校西、横枕および三芳村明石などにみられる。

この層は豊房累層の主部を整合におおうが、東方ではシルト岩層と指交している。

岩相は黄褐色の中粒砂またはスコリア質粗粒砂の間に角礫状～亜角礫状の灰白色シルト岩の中に大礫、ときに水磨されたチャートなど古生層礫を含む状態である。

数多くの貝化石を産出するのが特徴で、那古小学校西の露頭からは、次の化石などが知られている。

Cerithium sp., *Natica* (*Tectonatica*) *janthostoma*, *Ancistrolepis*, *troehoides*, *Microfusus magnificus*, *Kelletia lischkei*, *Nassarius* (*Zeuxis*) *caelatus*, *Cymatosyrinx* sp., *Antiplanes sadoensis*, *Brachytoma pseudorincipalis*, *Dentalium yokoyamai*, *Acila divaricata*, *Pseudogrammatodon obliquatus*, *Quinqueloculina* spp., *Elphidium*, *rispum*, *Rotalia nipponica*, *Cibicides refulgens*.

2-5 砂岩 2 (ss₂)

千倉累層中の砂岩で、三芳村南部に分布するものを嵯峨志凝灰質砂岩と呼んでいる。暗灰～黄褐色の中～粗粒の凝灰質砂岩であって、間に凝灰岩、シルト岩を挟んでいる。

2-6 泥岩 2 (ms₂)

千倉累層に含まれる石堂シルト岩に相当する。灰白色塊状のシルト岩が主であって、薄い凝灰岩、スコリア、砂岩などを挟むこともある。丸山町、和田町、三芳村にかけ分布している。

2-7 砂岩 3 (ss₃)

清澄砂岩層であって、この地域では北東端に僅かに分布し、塊状の粗粒砂から構成されている。

2-8 凝灰質砂岩泥岩互層 (altsmstl)

灰白色泥岩を主とし、これと互層して数cm~10数cmの軽石、スコリヤを含む凝灰質砂岩がある。稲子沢層と呼ばれ、層厚320m以上であって、*Robulus* sp., *Sagarites* sp. などの化石が知られている。

2-9 礫岩 2 (cg₂)

千畑礫岩、元名礫岩と呼ばれ、古生層に由来する砂岩、粘板岩、チャートなどを主とした円磨された礫が多く、泥および細粒砂によって凝結されている。富津市不動岩、鋸南町元名トンネル下などに分布し、次のような化石の産出が知られている。

Glycymeris vestita, *Glycymeris* sp., *Limopsis* sp., *Aequipecten* sp., *Propeamusium* sp., *Chlamys miurensis*, *Chlamys swifti*, *Chlamys kakisakiensis*, *Chlamys r-endoi*, *Miyagipecten matumoriensis*, *Patinopecten planicostulatus*, *Amussiopecten akiyamae*, *Placopecten akihoensis*, *Ostrea* sp. *Calypptogena* sp., *Crassatellites oblonga*, *Crassatellites oblonga* var., *Nemocardium samarangae*, *Cyclina orientalis*, *Macomia tokyoensis* *Perotrochus* sp., *Siphonalia* sp., *Tegulorhynchia doperleini*, *Echinolampas yoshiwarai*, *Astriclypeus* sp., *Stereocidaris grandis fusam*, *Arbacina pulcherrina*, *Flabellum transversale*, *Terebratalina gouldii*, *Laqueus* sp., *Carchadon megalodon*, *Oxyrhina hastalis*.

2-10 泥岩 3 (ms₃)

天津泥岩層に相当し、図幅北部で富津市内台付近を中心とした東西の分布、および南無谷から東へ分布し、灰白色泥岩を主とし、凝灰質砂岩を挟んでいる。

2-11 砂岩泥岩互層 2 (altms₂)

図幅北部の鋸南町市井原、中尾原などに分布する、佐久間層の中尾原互層および木の根頁岩質互層が典型的なものであり、丸山町鯨岡、長狭町西谷などにみられる細粒の凝灰質砂岩と泥岩の互層も、ほぼ同じ地質時代と推定される。

中尾原付近では灰色中粒砂岩と泥岩、市井原付近では、暗灰色細裂頁岩と暗黒色砂岩、白色泥岩などの互層となっており、鋸南町道越、吉浜、埋田などで次の化石が知られている。

Lepidocyclina makiyamai, *Miogypsina kotoi*, *Glycymeris derelictus*, *Venericardia ferruginosa*

2-12 凝灰質砂岩・泥岩互層 2 (altmst₂)

灰白色の凝灰岩あるいは灰色の凝灰質砂岩と泥岩の互層よりなる。佐久間層に属すると推定されるが、標式地の鋸南町佐久間地域に比し、凝灰質なのが特徴である。富浦町、三芳村に分布している。

2-13 砂岩礫岩互層 (altscg)

佐久間層の奥山互層に相当し、先第三紀層や保田層群の岩石などの、5 cm以下の円～亜角礫が多い礫岩と、粗粒暗灰色砂岩の互層からなり、ときに石炭、珪化木などを含むことがある。

2-14 礫岩 3 (cg₃)

佐久間層の大崩礫岩に相当し、鋸南町大崩付近では、厚さ300 mにもおよぶ。礫は主として古生層、保田層群の凝灰質砂岩などの10 cm以下の円～角礫よりなるが、玄武岩巨礫、緑色凝灰岩礫も含まれている。

この礫岩中より *Chlamys akihoensis*, *Aequipecten vesiculosa*などを産する。

2-15 砂岩泥岩互層 3 (altms₃)

暗灰色の砂岩と泥岩の互層であって、ときに凝灰質の部分を狭む。保田層群に相当し、鋸南町および富山町の富山の南地域などに分布している。

2-16 砂岩 4 (ss₄)

保田層群に属する典型的な暗灰色塊状の細～中粒凝灰質砂岩である。伊予岳、富山などを構成し、岩石は比較的強く、N値で200近い値を示している。

2-17 砂岩泥岩互層 4 (altms₄)

嶺岡層群に相当し、ほぼ東西に伸び、愛宕山の南に分布している。暗灰色硬質頁岩と、灰色の砂岩が主であって、他の地層群とは断層をもって境し、また、複雑に褶曲していて構造は不明である。

2-18 砂岩 5 (ss₅)

上記の嶺岡層群の岩石に挟まれて、愛宕山の北にNE—SWの走向をもち、急傾斜の砂岩が分布している。灰色中粒の砂岩で著しく固結が進んで硬くなっている。

3 火山性岩石

3-1 凝灰岩 1 (tr₁)

中三原凝灰角礫岩に相当し、比較的固結の弱い、黄褐色の角礫を含んだ細粒の凝灰岩ないしは砂質の凝灰岩である。

和田町中三原および三芳村高井ヶ谷で観察される。

3-2 凝灰岩 2 (tr₂)

竹岡凝灰岩に相当し、図幅中では鋸山向斜軸の軸部に小規模に分布している。火山礫スコリア、軽石などを含む砂質の凝灰岩である。

3-3 凝灰岩 3 (tr₃)

萩生火砕岩と呼ばれる岩石および鏡が浦凝灰岩であって、前者では暗褐色のスコリア、凝灰岩および軽石層を主体とし、ときに2 cmの粗粒の火山砕屑物を含んでおり、鋸山山腹に分布している。

後者は褐～黄褐色の凝灰岩であって、シルトを挟み、富浦町大房岬、船形などに分布している。

3-4 玄武岩 (B)

嶺岡山系の愛宕山東、富山町石原付近で、嶺岡層群に貫入した形で分布し、また、富山町奥組、花表裏などでは、佐久間層の大崩礫岩層の間に入る溶岩流として露出している。

一般に斑晶の少ない細粒の玄武岩であって、単斜輝石、斜長石、チタン磁鉄鉱および火山ガラスからなる。特に大崩礫岩層に挟まれる玄武岩ではガラス質なものが知られている。

4 深成岩

4-1 斑礫岩 (Gb)

この図幅地域では分布は狭く愛宕山東の斑礫岩と富山町川辺組の北の閃緑岩の小岩体を図示した。斑礫岩では暗灰色で主に普通角閃石と斜長石とからなり、少量のチタン鉄鉱、チタン磁鉄鉱を含んでいる。

4-2 蛇紋岩 (sp)

蛇紋岩の分布は、愛宕山付近から南西に、ほぼ嶺岡層群の硬い砂岩と平行して帯状の分布を示している。カンラン岩が蛇紋岩化された岩石であって、半ば以上は蛇紋石など変質鉱物からなり部分的にカンラン石、斜方輝石、単斜輝石を残している。

5 地質に関連した事項

5-1 鉱泉

この図幅地域では天然ガス徴の著しい地点は、長狭町金束湯沢、富山町岩婦などわずかであるが、鉱泉として知られている地点はかなりある。上記2地点を始め、富山町吉沢・吉井、高崎、鋸南町元名、市井原、三芳村増間、和田町押元などがあり、その水の組成は次のとおりである。

鉱泉の組成

地 点	pH	HCO ₃ ⁻ (mg/l)	CO ₃ ²⁻ (mg/l)	Cl ⁻ (mg/l)
金 束 湯 沢	9.0	107	37.5	70.0
吉 沢・吉 井	6.8	85.3	—	22.0
高 崎	8.1	506	—	1350
岩 婦	8.0	501	—	86.0
元 名	7.7	508	16.5	1560
増 間	8.8	188	29.3	492

5-2 砕石

この地域には約30近い採石場があって、土木用砕石として採掘されている。岩種別にみると、鋸山付近のいわゆる房州石と呼ばれる凝灰岩、骨材として使われる玄武岩、保田層群の砂岩などが主であって、このほかに、軽量骨材の原料として、膨張頁岩も保田層群の泥岩などを対象として掘られている。

(千葉大学 文部教官 近藤精造)

参 考 文 献

千葉県地学教育研究会(1968)：千葉県地学図集 第5集 二枚貝編

千葉県(1963)：20万分1 千葉県地質図

- 遠藤正夫（1969）：房総半島天羽町付近の地質 地学研究 20巻, 3, 4号, 99～106
- 小池 清（1949）：房総半島中部の地質（Ⅱ） 東大立地研報 3号, 1～6
- 成瀬 洋・杉村 新・小池 清（1951）：房総南端—新第三紀層— 地質雑, 57巻, 675号
511～525
- 本島公司・品田芳二郎（1971）：千葉県鴨川・勝山地域の天然ガスとヨウ素資源について
地調月報 22巻, 11号, 629～635
- 山岸忠夫（1960）：温泉鉱泉の研究, 房総半島における鉱泉の地質学的研究

Ⅲ 土 壤 図

1 山地・丘陵地地域の土壌

本図幅のうち、山地、丘陵地の土壌は褐色森林土壌が大部分を占め、ほかにはごく小面積の黒ボク土壌と、残積性未熟土壌とが認められるのみである。これらの土壌群は、母材や土性の違いによって再区分し、付表に示したように、15の土壌統に分類された。

褐色森林土壌の分布域は、乾性褐色森林土壌（BA, BB, BC）と、褐色森林土壌（適潤性褐色森林土壌, BD, BD-d）とに、ほぼ2等分される。BE型土壌は、本来は湿性褐色森林土壌として区分すべきものであるが、本図幅中では小面積の点在のみで図示が困難であるため、便宜上、褐色森林土壌（適潤性）に含めて表示した。

林野土壌の熟成は（すなわち生産力は）、地形にもとづく水分環境および堆積様式によって支配されるため、一般的には比較的急斜面の中腹以下、とくに沢沿いに褐色森林土壌（適潤性）が分布し、凸形斜面や、なだらかな起伏地形、尾根筋などが乾性褐色森林土壌の分布領域となる。本図幅上では鋸山周辺、富浦町の海より地域および図幅上の南東部の丘陵地に、乾性褐色森林土壌が集中し、褐色森林土壌（適潤性）は主として内陸部に分布する。とくに図幅中央部の増間と平久里地区は、千葉県内においても、林地生産力の高い地域として著名で、湿性褐色森林土壌は主としてこの地域の谷あいでも認められる。黒ボク土壌は大房岬と浮島だけに分布があった。

やせ尾根や海沿いの風衝地で認められる残積性未熟土壌は、暗褐色または黒褐色の薄い（通常20cm内外）腐植層（A層）が直ちに基岩に移行する土壌で、B層を欠くのが断面形態の特徴である。

人工造林の適木は、湿性褐色森林土壌の全域と褐色森林土壌（適潤性）の大部分においてはスギとするのが適当であり、褐色森林土壌（適潤性）のうち、粒状構造や堅果状構造を含んだ偏乾性土壌（BD-d）と、乾性褐色森林土壌の下部（BC型など）ではヒノキ、その他の乾性褐色森林土壌の地域では、マツの人工植栽または天然更新、自生広葉樹

の萌芽更新となる。残積性未熟土壌は、林業生産の場として役立つことは少ない。

このように、土地分類基本調査の成果を林地生産力の指針として利用する場合には、統分類に強くこだわることはあるまいと考える。土壌群の分類は、自然状態における土壌断面の形態的特徴によったものであるが、土壌の生成因子には、気候、地形、地質、生物および時間があり、母材や土性は、すでに土壌の生成過程における間接的影響力として、おりこまれているものである。

また、上にあげたような、土壌が影響をうける生成因子と、そこに生育する植物がうける環境因子とは同じものである。したがって土壌断面をみて、その植物がおかれている環境状態を読みとることができる。この土壌調査の成果を、そのような面にも活用されることを期待したい。

また山地の傾斜面に人工的に棚田をつくり、水田としてかなりの面積が利用されている。水田作の必要上、つきかため等によって人工的に漏水防止に永年にわたってつとめてきた。このため丘陵、山地の土壌でありながら人為的な灰色土壌、グライ土壌がかなりの面積にわたって分布している。

2 低地の土壌

低地の大部分は水田によって占められ、低地のやや高い所は集落となっている部分が多い。畑の多くは山地、丘陵地に小面積ずつ分散しているほか、低地では小面積、沖積面および砂丘上にある。

低地土壌の大部分は灰色低地土壌、グライ土壌の水田土壌である。山地土壌の項で述べたように、当図幅の範囲は母材がきわめて複雑であるので、それにとまって、灰色低地土壌、グライ土壌の土性もまた複雑に変化している。

また低地の地形も凹凸にとんでいるので、水はけの良、不良の差がきわめて多く、低湿の千葉県水田においては、乾湿の変化の最も大きいところである。この乾湿のちがいにより、灰色土壌、グライ土壌とわかれ、さらに酸化沈積物の有無、構造の有無に変化を与え、土壌統がわかれる。

細粒グライ土壌が最も多く、細粒灰色低地土壌、灰色低地土壌がこれについている。とくに、細粒グライ土壌は加茂川上流、丸山川その他各河川流域の水田に多い。細粒灰色低

第5表 山地, 丘

土 壤 群		土 壤 統	母 材
未熟土壌	残積性未熟土壌	白 浜 統	半固結, 各種岩石
黒ボク土壌	厚層黒ボク土壌	文 違 統 諸 持 統	ローム ローム+洪積
	黒ボク土壌	船 木 統	ローム+洪積
褐 色 森 林 土 壤	乾性褐色森林土壌	香 西 統	ローム+洪積
		上 岩 入 統	ローム+第三紀泥岩
		子 神 統	ローム+第三紀泥岩
		上 砂 1 統	ローム
		江 田 1 統	第三紀泥岩, 泥砂岩互層
		富 浦 1 統	第三紀泥岩, 半固結
		滝 田 1 統	固結硬砂岩, 頁岩
		滝 山 1 統	固結硬砂岩, 頁岩+ローム
		横 尾 統	第三紀泥岩
	宮 1 統	塩基性岩類固結	
	金 谷 統	凝灰岩, 半固結	
	褐色森林土壌 (適潤性)	江 田 2 統	第三紀泥岩, 泥砂岩互層
		富 浦 2 統	第三紀泥岩
		滝 田 2 統	固結硬砂岩, 頁岩
		千 倉 2 統	第三紀泥岩, 泥砂岩+ローム
		滝 山 2 統	固結硬砂岩, 泥岩+ローム
		宮 2 統	塩基性岩類, 固結
		細 野 統	第三紀泥岩
		山 間 統	第三紀泥岩
その他	丘陵細粒灰色土壌	大 崩 統	第三紀泥岩
	丘陵細粒グライ土壌	小 山 統	第三紀泥岩

陵 地 の 土 壤

土 性	出 現 地 形	土 壤 細 分
砂壤～粘	沿海風衝地, やせ尾根	I m 残積
壤～埴壤	台地	B L D
壤～埴壤	台地凹部	全層腐植層
壤～埴壤	台地	表層腐植層
壤～埴壤	台地低部	腐植層なし
壤粘～壤粘	斜面下部	
強粘～強粘	斜面下部	
壤～粘	山頂台地	B B 残積
壤～粘	丘陵地形, 山地斜面上部	B A, B B, B C 残積匍行
強粘～強粘	斜面上部, 尾根	B B, B C 残積匍行
壤～粘	斜面上部, 尾根	B B, B C 残積匍行
壤～粘	鈍頭尾根	B B 残積匍行
強粘～強粘	斜面	
粘～強粘	鈍頭尾根	B B, B C 残積匍行
砂	鋸山北斜面, 山頂近く	B B 匍行
壤～強粘	山地斜面の中腹以下	B D, B E 匍行, 残積
強粘	中腹以下, 沢沿い	B D, B E 匍行, 残積
壤～強粘	中腹以下, 沢沿い	B D, B E 匍行, 残積
壤～粘	山麓	B D 崩積, 全層腐植
壤～強粘	山麓	B D 崩積
粘～強粘	山麓	B D 崩積
粘～強粘	山麓	
強粘～強粘	山麓	斑紋あり
強粘	斜面	斑紋あり, 水田, 残積
強粘	斜面	強グライ, 水田, 残積

第6表 低地

土 壤 群		土 壤 統	母 材, 堆 積
未 熟 土 壤	砂 丘 未 熟 土 壤	櫛 統	海 成 (風 積)
褐 色 低 地 土 壤	褐 色 低 地 土 壤	布 施 統 真 倉 統	河 成 河 成, 三 紀
	粗 粒 褐 色 低 地 土 壤	松 岸 統	河 成
灰 色 低 地 土 壤	細 粒 灰 色 低 地 土 壤	下 布 施 統 米 沢 統	水 積 水 積
	灰 色 低 地 土 壤	村 上 統 平 三 統 塩 浦 統	水 積 水 積 水 積
グ ラ イ 土 壤	細 粒 グ ラ イ 土 壤	矢 田 統 夷 隅 統 干 潟 統	水 積 水 積 水 積
	グ ラ イ 土 壤	黒 部 統 馬 立 統 吉 田 統	水 積 水 積 水 積, 集 積 (泥 炭)

の 土 壤

グライ, 色	作 土 下			備 考
	土 性	酸化沈積物	構 造	
—	砂	な し	な し	
— 褐色	壤粘—壤粘 壤粘—壤粘	あ り な し	— —	沖 積 畑 沖 積 畑
褐色	砂 — 砂	な し	—	沖 積 畑
灰 褐色 灰 色	強 粘 強 粘	あ り あ り	あ り な し	水 田 水 田
灰 褐色 灰 色 灰 色	粘・壤 粘・壤 粘・壤—岩	あ り あ り あ り	あ り な し な し	水 田 水 田 水 田
グ ラ イ 強グ ラ イ グ ラ イ	強 粘 強 粘 強 粘	あ り あ り な し	な し な し な し	水 田 水 田 水 田
強グ ラ イ グ ラ イ グ ラ イ	壤 粘 壤 粘 壤 粘	あ り あ り な し	な し な し な し	水 田 水 田 水 田

地土壤は前者にともなって分布し、灰色低地土壤は、三芳村の平群川流域に多く分布している。

褐色低地土壤、粗粒褐色低地土壤は前記の河川沖積面に烏畑、部落として小面積ずつ分散して分布している。その面積は水田に比して小さいが、山地に分散している黒ボク等の畑をのぞいて、これ以外にほとんど畑がなく、また生産力も高いので、当地区としては貴重な畑である。

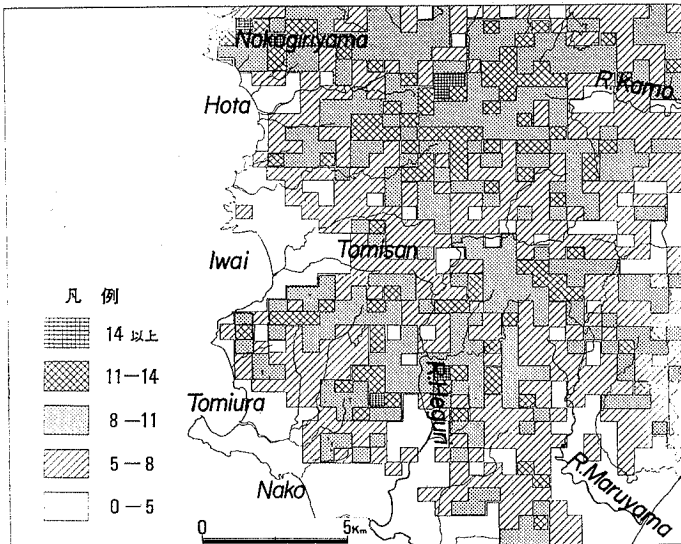
当地区に多い果樹園は、沖積面より、山地にかけての傾斜面に大部分があり、ミカン園、ビワ園とも山頂近くまである場合が多い。これらは母材、堆積様式の面から、山地・丘陵地の土壤としてあつかった。

砂丘未熟土壤は、海岸線にかなり多く分布しており、一部は畑地として利用されているが、大部分は部落、市街地となっている。

(林業試験場 榎本善夫)
(農業試験場 三好 洋)

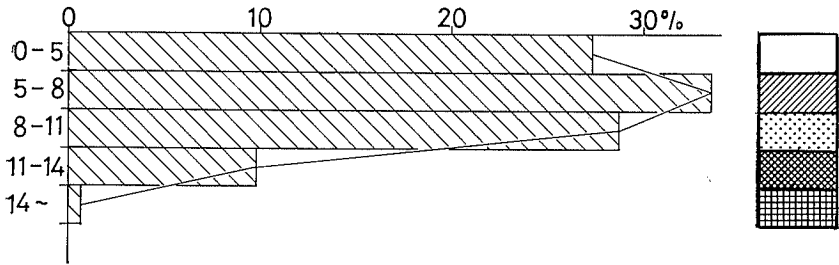
Ⅳ 水系および谷密度図

本図幅内の主要な水系をつくっている平久黒川、丸山川、保田川、岸井川、岡本川的主流をみると、地形分類に述べてあるように本図幅内の山地を構成した要因（地盤運動）の影響を受けていることが上記の各河川の流路の配置、流路の形状にあらわれている。地形分類図の山地や丘陵の配列や形状（輪郭）に沿って主流は流れている。しかし、その支流



第7図 谷密度分布図

図幅を縦横40等分した方眼の中で作業規程にしたがって谷密度をしらべ同数値のところを囲んで分布図としたもの。模様格子は谷密度14以上斜め格子は11-14、アミのところは8-11、斜線は5-8、無地は0-5のところである。



第8図 谷密度の数値分布（右の模様は第11図に同じ）

が山地や丘陵地を刻んでいるパターンをみると主流ほどのはっきりした形状はみられない。主流ほどには構造的な影響は受けていないようである。したがって当然のことながら、本図幅では、谷密度は、地形分類図の中のそれぞれの山地や丘陵地の中で高くなっている。

オーバーレイの水系密度図の方眼内の数値を処理し谷密度の分布状態をパターンに替えたものが第7図谷密度分布図である。この図を見ると江見和田丘陵、富浦丘陵と平久里川はじめ主要河川それぞれ上流地域に谷密度の低いところがある。これら各河川の上流は盆地状の平坦地となっている。

次にオーバーレイの谷密度の方眼内の数値を整理してみると第8図谷密度数値分布のようになる。この図は第8図の谷密度分布をつくっているそれぞれのパターンを数え処理したものである。谷密度数値分布の $0^{\circ}\sim 5^{\circ}$ 、 $5^{\circ}\sim 8^{\circ}$ 、 $8^{\circ}\sim 11^{\circ}$ のそれぞれが27パーセント以上を占めている。このことは隣の鴨川図幅と違って本図幅では山地や丘陵地がほぼ均等に開析されていると考えてよからう。

水系谷密度と切峯面、起伏量、傾斜分布図、表層地質図の各図との関係を見ると次のようになる。

切峯面図、起伏量と水系谷密度：本図幅にある水系の主流は切峯面図の等値線がつくる谷間を流れている。しかし、よくみると、丸山川のように等値線を直角に切って流れるものと、平久里川のように等値線のつくる谷間からかなり離れたところで流れるものがある。谷密度は切峯面がつくる地形の高まりや起伏量とは関係なく、地形分類図の中の山地や丘陵地のそれぞれの地域の中にほぼ均等に分布している。

傾斜分布と水系谷密度：本図幅では傾斜の大きいところと谷密度の大きいところは図

上で一致するところが多い、これは当地域をつくる山地、丘陵地の大部分が、砂岩、泥岩、その互層から構成されていることによるものであろう。したがって、本図幅では侵食は均等に進んでいると考えてよい。

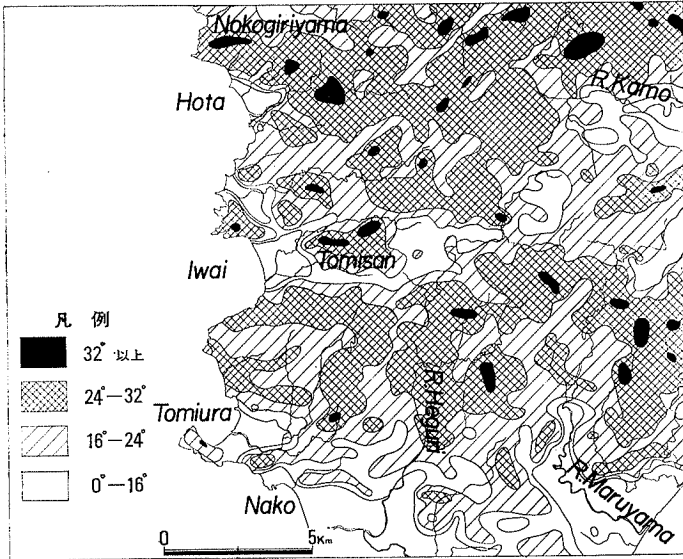
表層地質と水系谷密度：鴨川図幅の同じ項目のところに「清澄山塊の泥岩、砂岩とその互層地域の中では、水系谷密度に大きな違いは認められない……。」と記した。本図幅は安房層群、保田層群によってつくられている地域で山地、丘陵地は砂岩、泥岩とその互層地域から構成されている。本図幅の主要河川の流路が構造的運動に支配されていることは前記の通りである。しかし、支流や谷密度のパターンは岩質の僅かな違いや断層、ワレ目などの影響を受けているものと考えられる。

水理地質（あるいは水文地質）からみると、本図幅地域の地表水は少な目に見える。しかし本図幅の大部分が地回り地域に入っていること、切峯面の 200m 付近からの湧水が意外に多いことは地より地形と関係があるようで、当地域の水資源開発は研究する余地が残されているといえよう。

（千葉大学文部省教官 川崎逸郎）

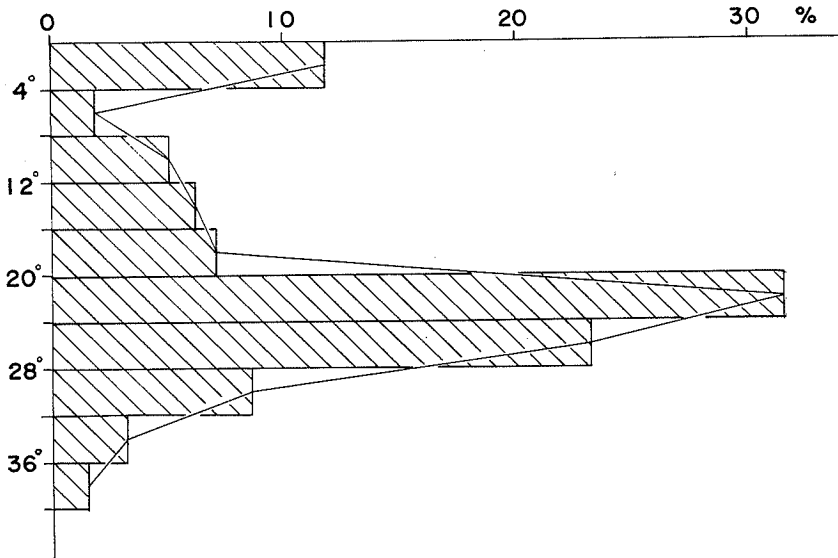
V 傾斜区分図

本図幅はすでに完成している鴨川、館山両図幅と違って、山地、丘陵地が図幅の大部分を占めている。那古図幅全域の傾斜の傾向や分布をオーバーレイの傾斜区分図から読みとることは難しい。それで地形図を縦横40等分した各方眼内において代表的な傾斜を等高線から読みとり、傾斜の等値線を描いたのが第9図の傾斜分布図である。この図は傾斜の傾向を読みとるためのもので、局所的な値は消えて、図幅全体の傾向と分布が表現されている。



第9図 傾斜分布図

図幅を縦横40等分した各方眼内において代表的な傾斜地点を読みとり等値線を引いたもの。模様黒地は32°以上、斜め格子は24°～32°、斜線は16°～24°、無地は0～16°のところである。



第10図 傾斜数値分布

る。つまり地域による傾斜値の変化とその地理的分布を表現したものである。オーバーレイの傾斜区分と併用していただきたい。

第9図の傾斜分布図の中で、 $24^{\circ}\sim 32^{\circ}$ のパターンが最も目につきやすく、地形分類図の山地、丘陵地それぞれの地域の中に配分し、本図幅では代表的な山容をつくっている傾斜である。また、 $24^{\circ}\sim 32^{\circ}$ のパターンは本図幅ではほぼ東西方向に分布し、西側、東京湾側に急斜面のまま海岸に迫っている地形が多い。これは本図幅の特徴といえよう。次に $16^{\circ}\sim 24^{\circ}$ のパターンは保田川を除いて各主要河川の上流地域に分布し、 $0\sim 16^{\circ}$ のパターンもまた同じ地域に分布している。とくに岩井低地から岩井川上流→平久里川上流→江見和田丘陵を結ぶ東西方向に $0\sim 16^{\circ}$ 、 $16^{\circ}\sim 24^{\circ}$ のパターンが分布し、本図幅で南北に二分している。

以上のような分布の中で最高値である 32° 以上の値が鋸山、富山の急斜面と地形分類図の山地、丘陵地の中で比較的尖頂となっているところに散在している。また、図幅全体の傾斜値の数値分布（どの程度の傾斜が多いか）をみたのが第10図である。これは前記方眼内の傾斜値を整理処理したもので、各傾斜値の頻度をみたものである。傾斜 20° 以上のと

ころが70パーセント近くあり、その中で20°～28°のところは両者合せて55パーセントを占めている。これが鴨川、館山図幅と大きく違うところである。

傾斜分布図と切峯面、起伏量、水系谷密度図、表層地質図の各図との関係を見ると次のようになる。

切峯面、起伏量と傾斜分布：鋸山、富山、清澄山地、嶺岡高鶴山地等を含む切峯面図の200m以上のところでは、傾斜の大きいところ(24°～32°)と切峯面図の等値線の高まりとほぼ一致しており、それはまた起伏量150m以上のところでもある。切峯面図の200m以下のところでは、切峯面の高まりのところ傾斜も大きくなっている。

水系谷密度と傾斜分布：別項「水系、谷密度」に記載

表層地質と傾斜分布：本図幅の大部分は安房層群、保田層群と呼ばれる砂岩、泥岩とその互層からなる地域で第2図切峯面図の地形では、この二つの層群の間には侵食や開析の度合や傾斜分布に大きな違いを見出すことは難しい。

切峯面図、起伏量、傾斜分布、水系谷密度表層地質からみると本図幅では、平久里川、丸山川等の主要河川の流路を決めるような一次的な地殻運動が起ってから後二次的な地殻運動(たぶん弱い上昇運動)が起ったようである。その結果はほぼ均等に侵食が進められ開析された地形ができあがったといえる(ただし、富浦丘陵と嶺岡高鶴山地を除く)。表層地質と傾斜分布はとくに密接な関係は見られないが、安房層群、保田層群とも地層の走向の方向に傾斜の大きいところがひろがっている。

(千葉大学文部教官 川崎逸郎)

Ⅵ 開発規制図

「那古図幅」は、内陸部に本県最高峰の愛宕山を始め鋸山、富山等県内では他にみられない300m級の山なみが続いており、国定公園、県立自然公園に指定されている。

一方、この地域の海岸部は、全域が国定公園に指定されており、しかも約95%が特別地域である。

さらにこの地域には、嶺岡山系の地すべり地帯、丸山地区の野生鳥獣保護区、地域に散在する文化財等、開発にあたって留意すべきことが多い。

1. 国定公園

本地域の海岸一帯と鋸山およびその周辺は、南房総国定公園の一画に指定されている。

本国定公園は、全域にわたり景観がすばらしく、域内の約95%が自然公園法における特別地域に指定されている。本図幅においては、内房の平島等小島は第1種特別地域に、内房の海岸一帯および鋸山とその周辺は第2種特別地域に指定されている。

公園区域内における行為は、公園計画に基づいて行なわれる事業のほかは一定の制限があり、自然の保全が図られている。

2. 県立公園

本地域には、富山を中山とした491haの県立富山自然公園と愛宕山を中心とした1,574haの県立嶺岡自然公園の一部がある。

公園区域は、全域普通地域であるが、域内の行為は、公園計画に基づく公園事業のほかは届出が義務づけられている。

3. 保安林

本地域の保安林は、海岸にそって防風、飛砂防備、魚つき保安林が連担し、内陸部では土砂流出、崩壊防備、水源かん養保安林がある。

これら保安林は、森林の働きを生かして水源を守り、水害等の災害を防ぎ、産業の保護や人間の豊かな暮らしに形立てることを目的として、森林法に基づいて指定されており、この目的を守るために立木伐採の制限、土地の形質の変更等の制限および植栽の義務の3つ

の規制を受けている。

4. 地すべり防止区域

南房総地域における地すべり区域は、鴨川市から安房郡鋸南町および富山町に至る東西約25km、南北約7～8kmにわたり、加茂川、曾呂川、保田川および岩井川に囲まれた帯状の区域で、その地層は、嶺岡層、保田層、佐久間層および火成岩類により構成されている。

本図幅における地すべり区域は、全体の中央部から西部にいたる区域である。

地すべり現象は、表層すべり、地層すべり等複雑で危険が伴うので地すべり等防止法に基づき県土の保全と民生の安定のための防止策が講じられるとともに、行為の制限等がとられている。

5. 鳥獣保護区

本地域は森林地域が多く、加えて温暖多雨という気象条件に恵まれているため野生鳥獣類が多く棲息している。

県は、地域の自然環境を保全し、鳥獣の保護養殖を図るため、鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律に基づき、本地域の東北部に嶺岡山鳥獣保護区および特別保護区と石堂保護区を設定するとともに鳥獣保護事業計画を策定し、その目的の達成に努めている。

また法律では、狩猟について免許規定をおくとともに狩猟鳥獣および狩猟期間等を定め乱獲の防止に努めている。

6. 文化財

本地域の文化財は、地勢上丘陵地が大部分を占めているところからも横穴群、洞窟、城跡等の埋蔵物、榎等樹木の天然記念物等、自然条件と深く関連したものが多い。

代表的な文化財は、天然記念物では県指定の「上三原の大樟」、「岩井の蘇鉄」、「柏楨」があり、史跡では丸山町にある「日本酪農発祥地」、「田子台遺跡」、「加茂遺跡」等5つの史跡がある。また、埋蔵文化財としては、鋸南町にある5～6世紀頃の古墳「大黒山横穴群」、「大黒山洞窟」等105の埋蔵物がある。

これらの扱いは、文化財保護法等により保護措置がとられている。

7. 国有林

この地域の国有林は、鋸南町と富浦町の海岸に防風林が7haある。

8. その他

(1) 海岸保全区域

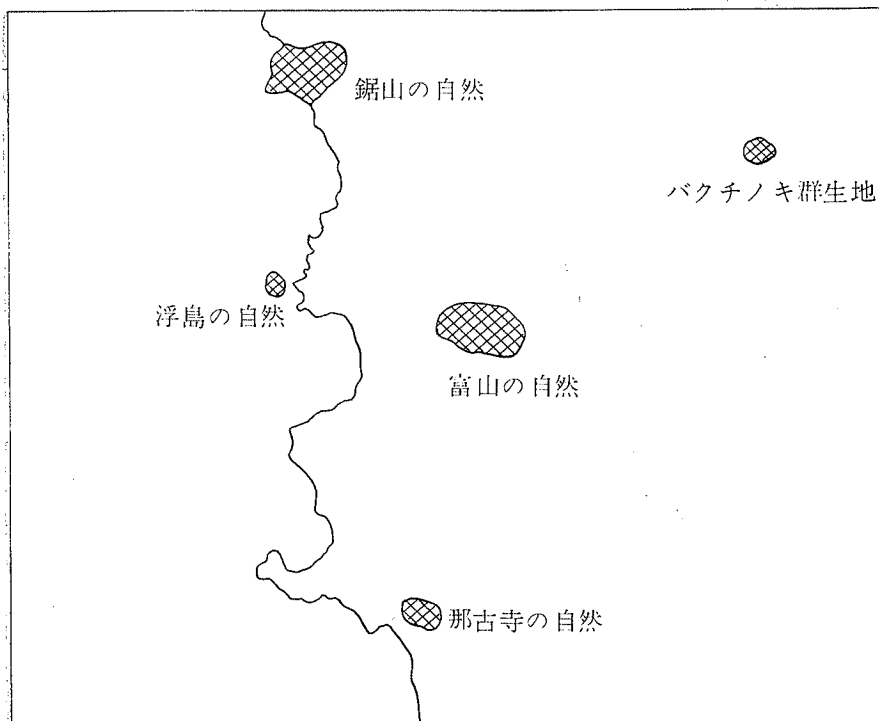
本地域の海岸保全区域は、保田、岩井、富浦の入江と館山湾の一部が指定されている。

概要は次のとおりである。

1. 保田海岸 1,800m
2. 富山海岸 2,300m
3. 富浦海岸 2,500m
4. 館山海岸 2,000m

これらの区域における土石の採取等の行為は、海岸法により規制されている。

第11図 学術上貴重な自然群の位置図



(2) 学術上貴重な自然群

本地域は、首都圏100km内にありながら自然が多く残っており、また学術的には貴重な自然群が多いので、これらの保護を積極的に図る必要がある。

(千葉県企画部企画課 熊本淑晴)

<参考文献>

千葉県の自然公園(千葉県自然公園協会)

国定公園シリーズ南房総(国立公園協会)

千葉県記念物所在地図(千葉県教育委員会)

自然見学シリーズ1千葉県の自然(千葉自然研究会)

千葉県の林業(千葉県農林部林務課)

<資料提供機関>

農林部農地課, 林務課, 都市部計画課土木部河川課, 教育庁文化課

Ⅶ 土地利用現況図

「那古図幅」は、約280km²の面積を有しているが、その大部分は、愛宕山、鋸山、富山を中心とした丘陵地であり、南部館山市に向って平野が広がるほかは保田川、佐久間川、平久里川、丸山川等の河川流域および海岸沿いに狭少な平坦地がある。

したがって館山平野を除いては山林原野が多く、自然をとどめており、農地、宅地とも自然の地勢にそって立地している。

この地域を構成する主要市町村の民有土地利用現況は、第7表のとおりである。

また、地目別土地利用現況は、次のとおりである。

1. 農地

この地域の農地は、佐久間川、平久里川、丸山川流域の平坦地に比較的優良な農地があるほかは、内陸丘陵地域に狭少な谷津田や傾斜地に畑地が散在している。

この地域の農業は、温暖な気象条件に恵まれ米作よりもむしろ酪農、みかん類の果樹、果菜類を中心に比較的豊かな農業が営まれてきたが、現在、さらに労働生産性、土地生産性の向上を図るためほ場整備、かんがい排水事業等の土地基盤整備事業が行なわれており、また農地の有効利用を促進するために農道の整備も進められている。

2. 林地

本県の林野率は約36%と全国の平均林野率68%をかなり下回っているが、この地域は本県の中でも地勢、気象等森林に対する自然条件に恵まれており、また急激に都市化、工業化の進展する本県の中では、その影響がきわめて弱い地域であり、森林地域として重要な位置を占めている。

しかしながらこの地域は、しゅう曲や断層の激しい複雑な地形の丘陵が多く、とくに嶺岡山系を中心に広範囲に地すべり地帯があるなど、造林による積極的な森林のそ生と保護が必要である。

このため、県は、長期的展望にたった森林計画をもとに、ヒノキ等の有望樹種を中心に地質にあった人工林の造成に努めている。

第7表 民有地土地利用現況

(單位 ha)

市町村 区分		天羽町	富浦町	富山町	鋸南町	三芳村	丸山町	計
		總面積	14,386	2,552	4,001	4,493	3,418	4,441
民有地總面積		6,742	1,486	2,169	2,163	1,887	2,493	16,940
構成比			58.2	54.2	48.1	55.2	56.1	
田	面積	1,456	279	549	554	687	843	4,377
	構成比 (%)		18.8	25.3	25.6	36.4	33.8	
畑	面積	391	273	305	277	234	313	1,793
	構成比 (%)		18.4	14.1	12.8	12.4	12.6	
宅地	面積	222	73	120	144	80	102	741
	構成比 (%)		4.9	5.5	6.7	4.2	4.1	
山林	面積	3,968	854	763	1,186	800	759	8,330
	構成比 (%)		57.5	35.2	54.8	42.4	30.4	
牧野	面積	90	—	114	—	—	217	421
	構成比 (%)		—	5.3	—	—	8.7	
原野	面積	528	5	318	—	86	255	1,192
	構成比 (%)		0.3	14.7	—	4.6	10.2	
雜種地	面積	78	2	—	1	—	3	84
	構成比 (%)		0.1	—	0.0	—	0.1	

現在森林面積の約60%を人工林で占めているが、鋸山のある鋸南町では、石切り場で象徴される地質と地勢から人工林は約27%である。

3. 都市・村落

この地域の宅地は、民有地面積の約5%で主に海岸沿いの低地や国道、県道、鉄道沿いに村落形態をなして散在しており、人口集中地区はない。

4. その他

愛宕山に航空自衛隊基地が約25haある。

(千葉県企画部企画課 熊本俣晴)

1973年3月 印刷発行

房総半島総合開発地域
土地分類基本調査

那 古

編集発行 千葉県企画部企画課
千葉県市場町1-1

印刷 統計印刷工業株式会社
東京都千代田区飯田橋2-17-9